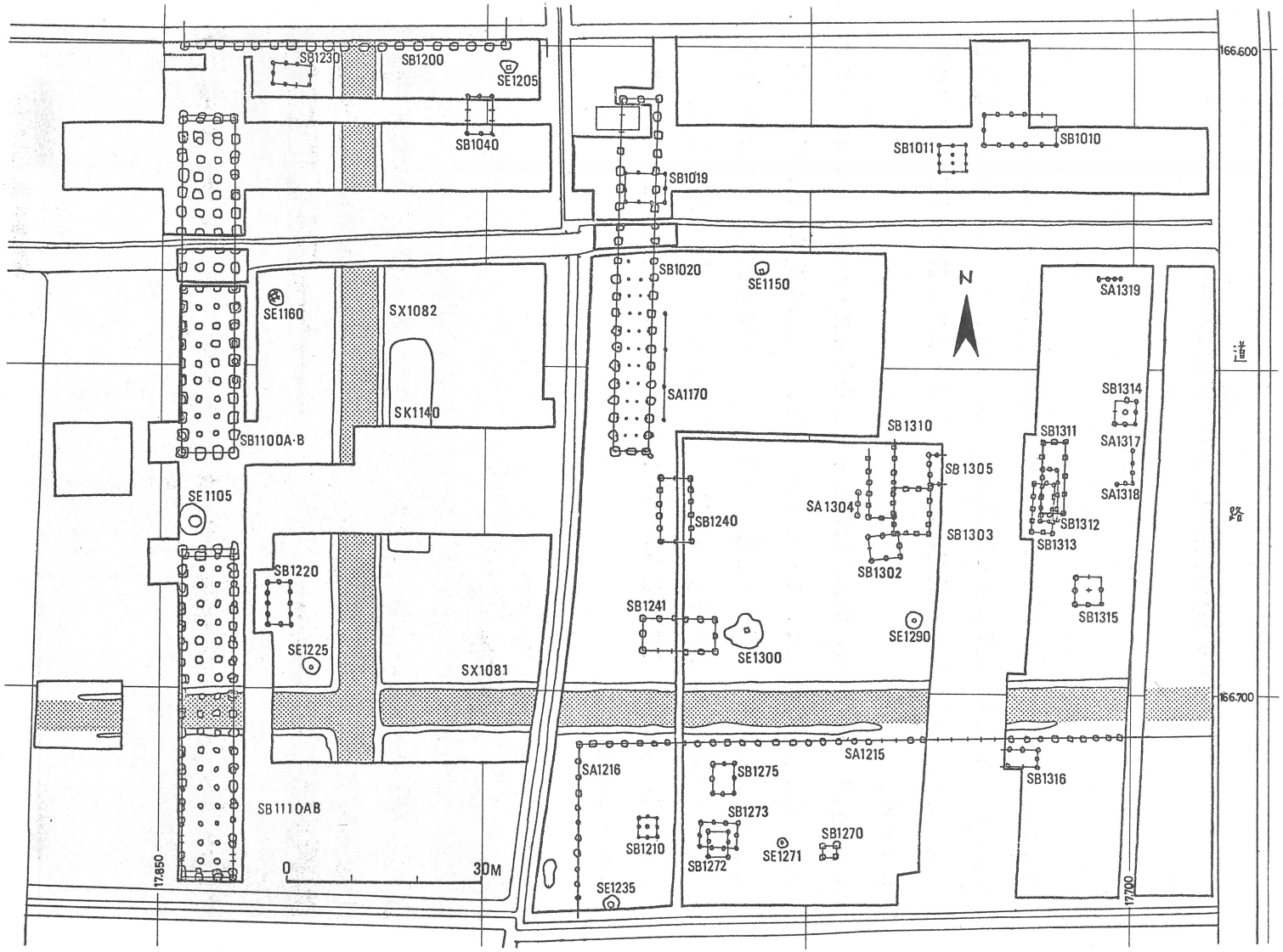
| 時期 | 遺構 | 柱間数 桁×梁 | 総長 桁×梁 |
|---|---|---|---|
| A期 | SX1081 東西道路 | (幅員6m) | |
| | SX1082 南北道路 | ( 〃 ) | |
| | SA1215 東西柵 | 43 以上 | 37間＝83.1 |
| | SA1216 南北柵 | 11 以上 | 10間＝23.0 |
| | SA1304 南北柵 | 2 | 2.8 |
| | SA1319 東西柵 | 3 | 4.3 |
| | SB1010 東西棟 | 5×2 | 11.1×4.8 |
| | SB1011 南北棟 | 3×2 (総柱) | 3.9×4.1 |
| | SB1019 東西棟 | 3×2 | 6.4×4.6 |
| | SB1040 南北棟 | 3×2 | 5.7×3.7 |
| | SB1210 | 2×2 (総柱) | 3.1×3.0 |
| | SB1220 南北棟 | 4×2 | 6.8×3.4 |
| | SB1230 東西棟 | 3×2 | 5.6×3.2 |
| | SB1240 南北棟 | 5×2 | 10.5×4.6 |
| | SB1241 東西棟 | 5×2 | 10.0×4.7 |
| | SB1270 | 1×1 | 2.2×1.6 |
| | SB1272 南北棟 | 2×1 | 4.2×3.2 |

| 時期 | 遺構 | 柱間数 桁×梁 | 総長 桁×梁 |
|---|---|---|---|
| A期 | SB1273 東西棟 | 3×2 | 5.0×3.6 |
| | SB1275 南北棟 | 2×2 | 4.8×3.6 |
| | SB1302 東西棟 | 2×2 | 3.6×3.4 |
| | SB1303 南北棟 | 4×3 | 6.5×4.0 |
| | SB1305 南北棟 | 3×2 | 4.7×3.2 |
| | SB1310 南北棟 | 6以上×2 | 9.9×3.2 |
| | SB1311 南北棟 | 4×2 | 9.2×3.8 |
| | SB1312 南北棟 | 4×2 | 7.3×3.2 |
| | SB1313 南北棟 | 4×2 | 8.0×3.9 |
| | SB1314 | 2×2 (総柱) | 3.5×3.2 |
| | SB1315 | 2×2 | 3.8×3.5 |
| | SB1316 東西棟 | 2以上×2 | 4.2×3.3 以上 |
| | SE1205 井戸 | | |
| | SE1235 〃 | | |
| | SE1290 〃 | | |
| | SE1300 〃 | | |

| 時期 | 遺構 | 柱間数 桁×梁 | 総長 桁×梁 |
|---|---|---|---|
| B期 | SB1100A 南北棟 | 18×3 | 51.0×8.0 |
| | SB1100B 南北棟 | 18×3 | 50.3×8.0 |
| | SB1110A 南北棟 | 18×3 | 48.0×8.0 |
| | SB1110B 南北棟 | 18×3 | 49.7×8.0 |
| | SB1200 東西棟 | 18× | 49.7× |
| | SB1020 南北棟 | 20×2 | 54.0×5.6 |
| | SA1170 南北柵 | 3 | 16.2 |
| | SE1105 井戸 | | |
| | SE1150 〃 | | |
| | SE1160 〃 | | |
| | SE1225 〃 | | |
| | SK1140 土壙 | | |

藤原宮第5～9次調査発掘遺構一覧表



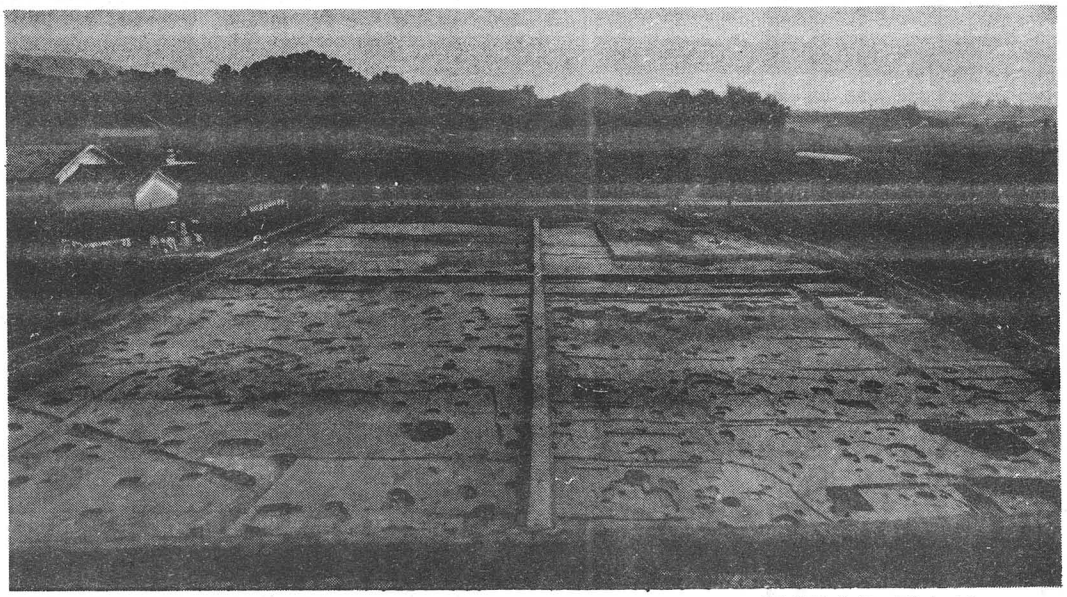

藤原宮第５～９次調査遺構配置図

# 小墾田宮推定地の第2次調査

調査地は、古宮土壇の西南約80m、岸俊男氏推定の「山田道」の北側で、昭和45年度に実施した第1次調査地の西方にあたる。従来、この付近一帯は小墾田宮跡と推定されており、第1次調査において、7世紀前半の溝や庭園遺構などを検出している。

調査の結果、この地域の旧地形は起伏しながら西北方へ傾斜しており、このゆるい傾斜地を盛土整地していることが判明した。検出した遺構には、竪穴住居4・掘立柱建物7・柵9・溝7・土壙16・井戸1などがある。これらの遺構は6世紀以前（古墳時代）、7世紀代、8世紀代、それ以降の4期に大別できる。

古墳時代の遺構　竪穴住居SB160・161・162・163、土壙SK240・245、井戸SE290などがある。



調査地全景（北から）

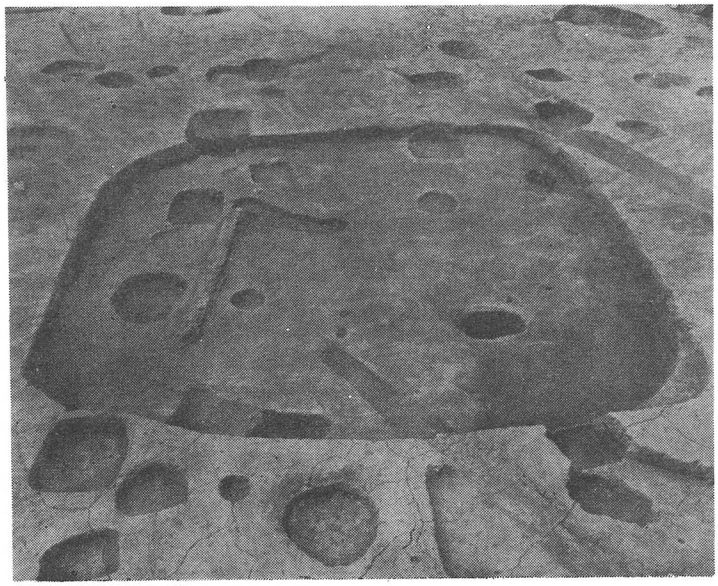
SB160 は隅丸方形で、東西4.6 m、南北 4.3 m、現深さ 0.1 m、床面で柱穴を4個検出した。周溝・カマド等は検出されなかった。この住居は火災にあったらしく、建築材が焼け落ちた状態で遺存しており、東寄りの床面上では土師器が火災当時置かれていたままの状態で出土した。

SB161は長方形プランで、東西 3.7 m、南北 4.9 m、現深さ約 0.1 m、柱穴を4個検出した。周溝・カマドの施設は確認されなかった。

SB162は方形プランとみられるもので、南半はＳＤ２０２によって破壊されており、全規模は不明である。東西 4.8 m、現深さ 0.1 m、柱穴を4個検出した。東壁中央にカマドの施設がある。周溝はめぐらされていない。

SB163はSD202・SK260によって破壊されており、東壁の中央にカマドの一部を検出したのみである。カマドは直接東壁に粘土で作り付けられており、その中央下部より住居外に煙道が延びている。

これらの竪穴住居は、出土遺物により、5世紀末葉（SB160）と6世紀前半（SB162）の二時期に分けられる。前者にはカマドの施設はないが後者にはみられた。SE290は径約1.3 m、深さ0.55 m の素掘りの井戸である。SK240からは布留式土器が、SK245からは6世紀中頃の土器が出土した。



竪穴住居（SX160）

7世紀代の遺構

掘立柱建物SB165・170・180・187、柵SA195・196・197・198・203・204、溝SD050・200・201・202・210・211、土壙SK249・250 などがある。

SB165は8間×3間（18.8×5.3 m ）の東西棟で、真東西に対して西で10°北に傾いている。いずれの柱穴にも柱痕跡

が認められたが、西妻柱穴は検出できなかった。

SB170は建物の北半部が発掘区外のため全規模は確認出来なかったが、3間（5.7ｍ）×2間以上の総柱の建物と考えられる。真東西に対して西で20°南へ傾いている。

SB180は4間×2間（6.0×4.0ｍ）の建物で、真東西に対して西で33°北へ傾いている。柱穴の大きさは均一でなく、柱痕跡も一部にしか確認されなかった。

SB187は7間×1間（15.1×2.2ｍ）の東西棟で、真東西に対して西で1°北へ傾いている。南側柱列には、すべて柱痕跡が認められたが、北側柱列では一部検出されたのみである。

SA195は5間（柱間2.1ｍ）で、真北に対して北で1°東に傾いている。

SA196はSB187の北側柱列の北側で検出した7間（柱間2.1ｍ）の東西柵で、SB187の北側柱と重複しており、SB187の北側柱の建てかえを示すものであろう。

SA197は南北柵で、南端で西へ直角に折れ曲がりSA198となる。いずれも発掘区外へ延びるため全規模は不明であるが、SA197は11間（柱間1.75～2.2ｍ）分、SA198は2間分（柱間1.75ｍ～2.2ｍ）を検出した。SA197は真北に対して北で3°西に傾いている。

SA204は3間（柱間3.4ｍ）の東西柵で、SB170と柱筋がそろっている。SA203は3間（柱間1.1ｍ）の南北柵で、真北に対して北で28°西へ傾いている。

SD050は第1次調査で検出した石組溝の北西延長部にあたる。この溝は7世紀前半の整地層を掘り込んで作られている。北岸は0.2ｍ～0.5ｍ大の河原石を2段積あげて側壁としている。南と東側は土壙によって破壊されていた。SD206は全長11ｍ、幅約0.7ｍ、深さ0.6ｍの素掘りの南北溝で、溝中より7世紀後半の土器が出土した。

SD200はSD201にほぼ平行の位置にある素掘りの大溝で、全長16ｍ以上、幅約3.8ｍ、深さ約0.5ｍである。

SD201は南東から北西に向けて流れる素掘りの溝で、全長27ｍ以上、幅1.15ｍ深さ約0.2ｍで、真東西に対し西で12.5°北へ傾いている。SD202は西流する素掘りの東西溝で、全長26ｍ以上、幅約2ｍ、深さ約0.15ｍである。

SD210は全長14m以上、幅約0.6m深さ約0.1m の素掘りの溝で、真東西に対して西で23.5°北に傾いている。西端でSD211に連なる。SD211は全長5m以上、幅0.75m、深さ約0.3mの素掘りの溝で、真北に対して北で約8°東に傾いている。

これらの遺構は出土遺物より、2期に分けられる。7世紀前半の遺構には、SB165・170・180、SD050・200・201・202・210・211、7世紀後半の遺構には、SB187、SA195・196・197・198、SD206、がある。

8世紀代の遺構　　掘立柱建物SB175・185・186、柵SA190・191、溝 SD205、土壙SK260・270、井戸SE295などがある。これらの遺構は、8世紀初頭の遺物を含む盛土整地層の上で検出したものである。

SB175は2間以上×3間(4.7m)の東西棟である。真北に対し北で約1°西に傾いている。

SB185は4間×2間(8.8×3.2m)の東西棟で、この西に並ぶSB186は 3間×1間(2.3×1.8m)の東西棟である。いずれも真東西に対し西で1°南に傾いている。これらの建物の柱穴の掘りかたは不揃いである。

SA191は4間の南北柵(柱間約 2.5 m)である。真北に対し北で1°西に傾いている。SB175の西妻柱列と柱筋がそろっており、この建物に取付いていた可能性もある。この柵は南で西へ直角に折れ、SB185・186の南側を通る東西柵SA190となる。SA190は今回15間分検出したが、さらに西方へ延びている。真東に対して西で1°南に傾いている。柱間は2.5mである。

SD205はSA190の南2.4mのところにあり、これと平行する東西溝である。幅約1m、深さ0.1 m～0.8 m である。両端は発掘区外に延びるが、全長41mを検出した。

SK260はSA190の南12mの位置で検出した。東西に長い溝状の土壙で、西は調査区外に延びるが、全長27m以上、幅6m～3m、深さ0.1m～0.4mである。溝東端で神亀の頃の土器を多量に検出した。

SK270はSB185・186、SA190と重複しており、これらの建物より新しい。

SE295はSK260の北岸にある。円形の素掘りの井戸で、直径約2m、深さ約1.7mである。

これらの遺構のうち、SB175・185・186、SA190・191、SD205は、同一時期の造営になるものと考えられる。すなわち、SB175、SA190・191は柱筋をそろえていることから一連のものと考えられること、SA190もSB185・186もSK270に破壊されているが、SK270の出土遺物より、これらの遺構は8世紀はじめのものとみられる。SK260も出土遺物から8世紀前半のものとみられる。

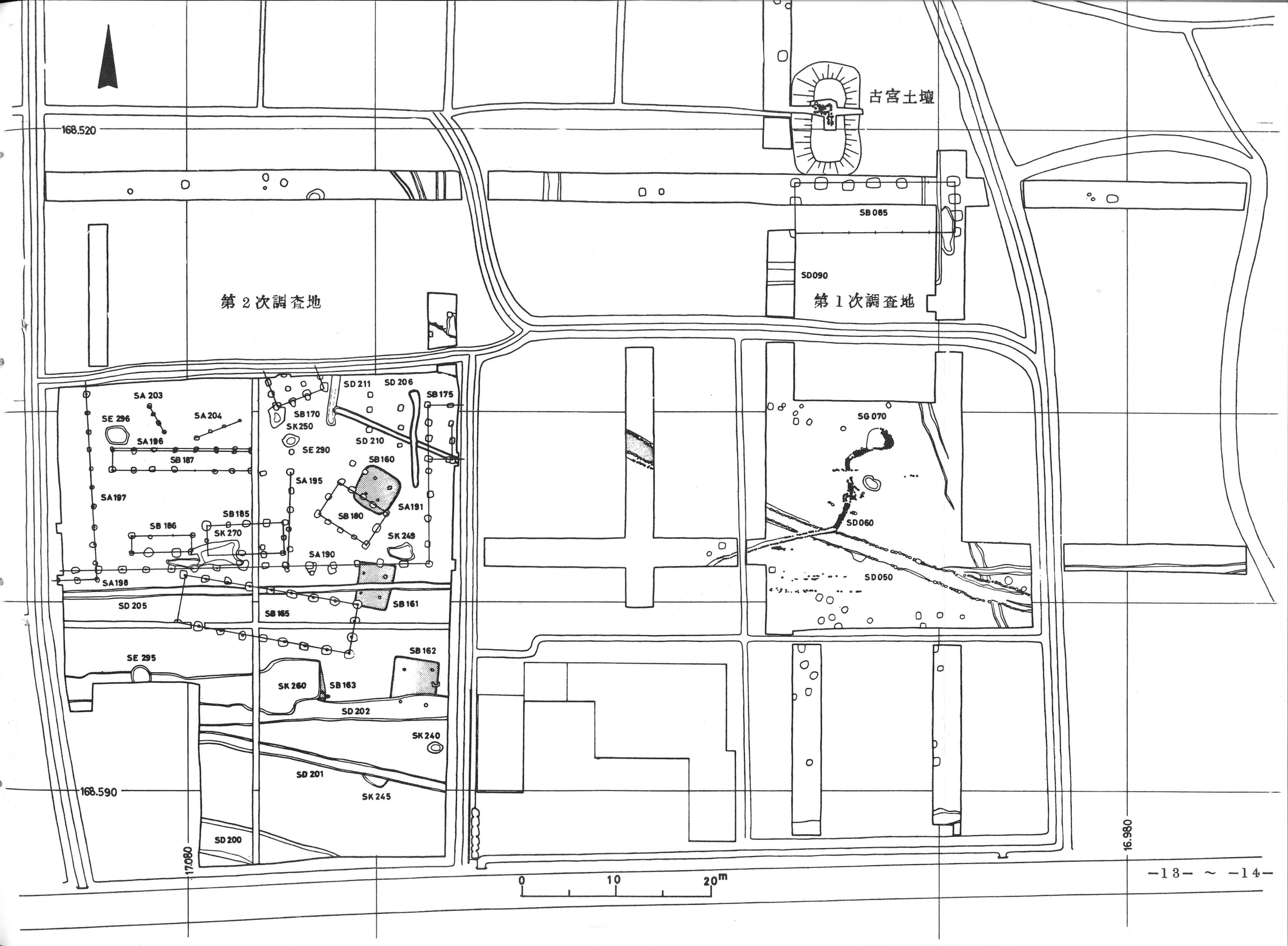
以上の古墳時代から奈良時代にわたる遺構群の他に、中世の東西方向の溝、南北方向の溝、土壙、井戸SE296などを検出した。

遺物　　土師器、須恵器、瓦器、弥生式土器、瓦、石鏃、石製模造品、鉄製の小型馬鍬などがある。SK260出土土師器には「口家小万呂」と墨書したものが一点ある。瓦の出土量は多くなく、北半部ではほとんど出土しなかった。

以上、発掘調査の概要を記したが、各期の遺構の配置、方位をみると、7世紀後半より8世紀初めの遺構は、ほぼ真北方位をとり、遺構が関連をもって配置されているのに対し、7世紀前半の遺構は、いずれも方位がふれており、関連性をもって造営されたとみられる遺構群は明瞭でない。ただし、7世紀前半の遺構には、方位が真東西に対して西で10°～30°北へ傾いている遺構の多いことが指摘でき、これらが古い地割りに関連していることも考えられるが、今後の課題である。ところで、第1次調査の際、今回の調査区の東方一帯に7世紀前半の盛土整地が認められたが、今回の調査では、この盛土整地層はわずかにSD050の付近で検出しただけである。8世紀初めには、今回の調査区の北半に新たに盛土整地を行ない、建物を計画的に造営していることが確められた。SA190は8世紀初めに盛土整地して造営した建物群の南限を区画する施設と推定される。

今回検出した建物は、7～8世紀にかけていずれも発掘区北半に限られており、南半にはみられない。このことは、南側を通る県道あたりが「山田道」と推定されていることを想起すると、この「山田道」と何らかの関係があるものかもしれない。しかし、7世紀前半には、県道下に入り込む大溝SD200などが存在しており、「山田道」の位置や造営時期等については今後さらに検討する必要があろう。

小墾田宮推定地第1次・第2次調査
遺構配置図 ⟶


古宮土壇
168.520
SB 085
SD090
第 1 次調査地
第 2 次調査地
SA 203
SE 296
SA 204
SA196
SB 187
SA197
SB 186
SB185
SK 270
SA198
SD 205
SD 211
SD 206
SB175
SB170
SK250
SE 290
SD 210
SB160
SA 195
SA191
SB 180
SK 249
SA 190
SB 165
SB 161
SE 295
SB 162
SK 260
SB 163
SD 202
SK 240
SD 201
SK 245
SD 200
168.590
17.080
SG 070
SD060
SD050
16.980
0
10
20m